

国際協力特別賞

大きな夢を小さな種にのせて

北海道美幌高等学校 生産環境科学科 3年

荒井 佳也乃

「品種改良に約10年。大学卒業後は、23歳。女性の平均寿命が80歳だから・・・、5つくらいアライ野菜シリーズができるかな？」

中学校の先生との会話です。私は、神戸市出身。農家で無い私が農業高校に興味を持ったきっかけは、北海道美幌高等学校へ通っていた兄の影響です。兄の帰省のたびに聞いていた農業実習や学校生活の充実感溢れる話に様々なことにチャレンジできると思ったからです。特に兄は20種類近くのタマネギを比較栽培研究しており、私は「店頭に並んでいるのは“タマネギ”としか表示されていないのに、なんでそんなたくさん栽培しているの？」と聞くと「それぞれの地域の気候や土壌、消費者のニーズに合わせている。」と教えてくれました。消費者にとっては同じ野菜なのに、それぞれの野菜に合った栽培があることを知り「品種って面白そう。」と興味を持ち、兄と同じ北海道美幌高等学校へ進学しました。

2年生の時に、プロジェクト活動でイチゴの生長点培養など、農業の基礎的な実験を経験しました。イチゴの芽の皮をはいで、成長点を取り出し、培地で育成しました。育成した芽は、苗としてポットに移し、畑で順調に成長中です。農業の科学的な側面を学ぶとともに、顕微鏡で見る成長点は小さいながらも成長している様子が感じられました。

授業で学んだ経験を活かし、不透明だった品種改良に具体性を増すため、講演会や農業試験場を見学・学習しに行きました。

このような経験から将来は、野菜の品種改良をする研究者になるのが夢です。そして、3つの目標があります。

1つ目は、食糧危機を考えた品種改良を目指します。緑の革命の講演会に稲塚秀孝さんに来ていただきました。ここで戦後の食糧危機を救った小麦農林10号の開発までの道のりを聞き、地道な努力の大切さを知りました。現在の日本は人口が減少傾向にありますが、世界的に見ると増加しています。今の時点で満足な食事が摂れていない人が大勢いる。そこで私の目標となったのは耐病性と反収をあげる品種改良です。それにより、世界的な食糧危機を防ぐ救世主になりたいです。

2つ目は、消費者の求める品種改良を目指します。研究者とはどのような仕事かを知るため、北見農業試験場の一般公開に参加しました。イネやジャガイモの比較栽培、農薬の散布量の調節など、地域の栽培課題などから品種改良を行っていることを学びました。特に、生産者だけでなく、加工業者や消費者のニーズに合わせた改良が行われていました。さらに、2年生から本格的に販売実習が始まり、消費者の意見を聞くことで生産のロスを少なくすることができることを学びました。しかし、農業の知識は少なく、接客で質問に答えられない場面が多くありました。それ以降事前学習をしっかりとすることで対応できるようになりました。今後は、消費者のニーズや野菜の栄養を高め、消費者の健康を保つ品種改良をしていきたいです。

3つ目は種子を守り広める品種改良を目指します。種子法の講演会に参加することで、

種子には法律があることや世界では、種子を巡る論争が起きていることを学びました。日本では、今年4月1日に主要農作物種子法が廃止されています。私は、種子生産が国から民間企業に移ったことで本来種子は誰のものでもなかったのに一部の企業に独占されてしまうのは不思議に思いました。また、民間企業が種子生産をすることで利益を重視するようになり、小規模で生産している品種が消滅してしまうと考えました。現在はプロジェクト活動でバイオテクノロジーについての研究を行っており、高校卒業後は、野菜の品種改良を学ぶことができる大学へ進学予定です。品種改良に約10年。大きな夢を抱き、小さな種が発芽するまでには時間がかかりそう。しかし、多くの養分・経験を吸収しつつ、毎日の管理を続けます。